令和３年度
第４３回少年の主張東毛地区大会

令和３年度第４３回少年の主張東毛地区大会が、８月２１日（土)、邑楽町中央公民館にて開催されました。

この大会は、中学生が「日頃の生活を通して感じていることや考えていること」を、自分の言葉で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って、毎年開催されています。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、入場者を制限し、前半、後半の２部制で実施しました。

各市町より推薦された１９名の発表者は、それぞれの主張を、力強く、堂々と発表してくれました。

最優秀賞に選ばれた４名の主張を掲載します。（発表順）

「本物の輝き」

太田市立南中学校　３年　富田　樹香

みなさんは、日本一危険な国宝が何か知っていますか。それは、鳥取県の三徳山三佛寺にある『投入堂』というお堂です。断崖絶壁をくりぬいたような空間に、危なげにたたずむ不思議な投入堂。どうしてこんな所に建てられているのか。写真を見るだけでも興味をそそられるこの場所に、私は母に誘われて二〇一九年の五月に参拝してきました。

私が住んでいる群馬県から、遠く離れた鳥取県にある投入堂。夜行バスや電車、市バスなどを乗り継いで、やっとの思いで到着した入山口。私たちは「六根清浄」と書かれた襷を肩にかけ、神聖な山へと足を踏み入れました。その途端、五感が急に研ぎ澄まされたような不思議な感覚に襲われました。こんこんと湧き出る清水、どこからか聞こえる鳥のさえずり、湿った苔と土の匂い…。身体全体が、まるで自然と一体化したようでした。滑りやすい木の根や鎖を足場にして、命綱なしで登らなくてはならない険しい山道。自然に身をゆだねつつも、全身の筋肉を使って重力に逆らいながら歩みを進めました。

「あれだ！」

少し開けた景色の先に見えたのは、まさにあの写真にあった投入堂。雄大な自然に囲まれ、鎮座するお堂の威厳ある佇まいに私は息をのみ、ただただ「すごい…。」という言葉を繰り返すばかりでした。あの時の衝撃と感動は、今でも鮮明に覚えていますが、うまく言葉にすることはできません。そんなかけがえのない体験になりました。

私はこれまでに、教科書や本に載っているような、国宝や世界遺産、お城などをいくつも巡ってきました。それは母の影響です。母のモットーは、『本物を知る』こと。幼い頃から私や兄を、全国のいろいろな所へ連れて行ってくれました。私は幼い頃から好奇心が旺盛で、疑問に思ったことを何でも質問するような子どもでした。私が興味を示すと母は、

「それ、絶対本物を見た方がいいよ！」

と言って、実物を目にする機会をたくさん与えてくれました。小学一年生の時に、この旅の最初の地として訪れたひめゆりの塔。当時の私にはさほどの知識もありませんでしたが、何とも言えない強烈な衝撃を受けたことは、今でもはっきりと覚えています。思えばあの時から、私も『本物を知る』ことに魅了されていたのかもしれません。

デジタル化が急速に進む現代、日本を初め世界中で、バーチャルな世界の可能性が広がっています。いろいろなことを疑似体験できるようになることが、技術の進歩として賞賛されることも珍しくありません。また、そんな折に私達を襲った、コロナウイルスの猛威。ステイホームの名のもとに、インターネットや電子機器を活用する生活の在り方が求められるようになり、それらに対する期待や価値も高まりました。

時代の流れに逆行しているかもしれませんが、私はこういった風潮に、ぼんやりとした疑問を抱いています。それは、私や母が大切にしてきた『本物の価値』が薄れていくように感じるからです。本物がもつ力は本当に凄い。手間や時間をかけて本物を訪ねるからこそ、そのものの質感や色合い、大きさ、匂い、雰囲気などが実感をもって感じられ、どのような風土を背景に存在しているのかが分かる。それこそが『本物の学び』になると思うのです。現代のテクノロジーを駆使すれば、遠く離れた場所にあるものでも、簡単に画面を通して見ることができますし、自分が知りたい情報があれば、即座に調べることもできます。それも一種の学びや経験であり、価値がないとは思いません。しかしそれは、記憶に焼き付くような深い学びと言えるのでしょうか。木の根をつかみ、ぬかるんだ登山道を一生懸命上った先に見たあの感動は、画面を眺めただけのものとは全く異質なものだと思いませんか。

私は、『本物を知る』ことの価値を教えてくれた母に感謝しています。私達が生きていくこれからの世界は、いろいろなテクノロジーが発達し、きっと想像も

つかないほど便利な世の中になっていくのだと思います。それでも私は、手間や時間をかけて『本物』を訪ねる旅を続けたいと思います。母や家族と旅をし、自分一人で旅をし、自分の子供や孫たちともそんな旅を続けていくことが、今の私の夢です。それが私の人生を豊かなものにしてくれると確信しています。

最後に皆さんに問いかけます。あなたが今、目にし、感じているものは『本物』ですか。

「過去・現在・未来」

太田市立西中学校　３年　新田山　小鈴

「人の命は大切。」どれだけの人がこの言葉を口にし、心の中で考えたことがあるのでしょうか。私はこの言葉を聞くたびに、この言葉は「戦争」と矛盾していると感じます。

小学校二年生の時、友達が病気で亡くなりました。彼とは小学校一年生で出会い、同じクラスで、彼は酸素ボンベを横におき、先生の隣で授業を受けていました。当時の私には到底彼の病気を理解することはできませんでしたが、担任の先生に他の同級生と遊ばない事を心配されるほど、私たちはいつも一緒でした。二年生ではクラスは違いましたが、帰りに必ず彼のいる教室により、バイバイと手を振り合うのが、私たちの毎日でした。しばらくして彼は学校を休みがちになり、そのうちこなくなりました。どうしているだろう、先生に聞いても体調が悪いから、答えは同じでした。そんな彼と久しぶりに会えたのは、特例で救急車にのって学校へ来た時でした。クラスが違う私は話すことはできませんでした。「でも大丈夫。元気になって学校で会える。」そう思っていた私に届いた知らせは、彼の「死」でした。もっと話したかった。もっと笑い合いたかった。一緒に大人になっていきたかった。ただそれだけの事ができません。会いたいとどれだけ願っても、二度と会えません。私は小学校二年生で、あたり前である命があたり前ではない事を経験し、初めて心の底から「命は大切。」そう感じました。

小学校二年生でもわかる命の大切さ。世界中がわかっていれば、平和が訪れるはずです。でもこの世界には戦争というものがあります。

四十五か国。この国の数は今現在、戦争や紛争が行われている国の数です。私の国では戦争はおきていないから関係ない。ではなぜ命は大切だと言い、それを子供たちに教えるのですか？関係ない？なぜですか。私たちが温かい食事を食べている間、ゴミの山から食べ物を探し食べている人がいます。家族と笑い合っている間、戦争にまきこまれ、はぐれてしまった家族を探している人がいます。

私たちが鬼ごっこをしている間、銃声から逃げている人がいます。幸せで心がいっぱいになっている間、悲しみで心をいっぱいにしている人が、この世界中に何千人、何万人、何億人といます。本当に関係ありませんか？あなたは、大切な人をなくした時、泣きませんでしたか。私は泣きました。声をあげて泣きました。同じように悲しんでいる人が世界中にいます。この世界は平和。私はどうしても、そう思う事ができません。

今インターネットが、あってあたり前の時代になっています。そして、誹謗中傷などに使われてしまっています。ネット上にのったことは、簡単に消せません。でも、そんなネットだからこそ、できる事があると私は考えました。戦争をなくし、平和を願う思いを発信するのです。それはネットのなかに記録として残ります。発信する人が多いほど、多くの人の目にとまり、誰かの心を動かす事もできると思います。

日本には原爆がおとされました。原爆を実際に経験し、その恐怖を私たちに教えてくれる方々は、どんどん減ってきています。だからこそ、より深く「命」と「戦争」について考えなくてはなりません。人は話す事ができ、頭を使う事ができ、体を動かす事ができます。多くの事ができるのに、それを「命を奪う戦争」に使っています。人間が戦争をしているのです。命を奪っているのは人間自身です。世界中の一人一人が「命の大切さ」をみつめなおし、たとえ私のように悲しみの経験がなくても、自分の事のように考えられる心を育てていく必要があると思います。そうすれば決して人事として、テレビやネットで流れる戦争の残酷さを見すごす事はできないからです。今を生きる私たちがこれからの未来をつくると信じ、今を生きる私たちだからこそできる事をしていきたいです。笑顔あふれる世界を目指して。

「互いを受け入れられる社会へ」

館林市立第三中学校　３年　カラム・アティカ

「もう一度両親会いたかった。」

そう言っていた私の父は常にバングラディシュにいる自分の家族のことを考えていた。しかし、バングラディシュは父の母国ではない。祖父と祖母は「難民」として、バングラディシュにいた。そして、父と私も「難民」として日本に住んでいる。なぜ、「難民」という人々が世界にいるのだろうか。

私の祖父と祖母は一度も会わないまま他界してしまった。父は、母国のミャンマーから逃れてから、祖父と祖母には会えなかった。会えなかった理由は、「イ

スラム教」だからだ。ミャンマーに戻ろうとすると命が危ないのだ。父は悲しさだけではなく悔しさもあったと思う。

また、「違う」国に行ったからといって必ずしも幸せになるわけではない。父の話によると、バングラディッシュにいる家族は難民キャンプというところで生活をしている。バングラディッシュは、発展途上国とうこともあり、たくさんの難民を一度に受け入れることは難しいという。病院に行くことも、学校に行くことも難しい。だから、自分の国を出られたとしても良い生活ができるということではないのだ。

また、私の父もミャンマーを逃れてからいろいろな国を転々とし、最終に日本に来た。しかし、その日本でも「難民」と認められるのは簡単ではない。多くの裁判をへて、弁護士や周りの人に支えられて、やっとの思いで「難民」として生きていくことを認められた。

「難民」が世界にいる理由。それは、お互いが、お互いの考え方の違いを受け入れようとしないからだ。お互いの考え方の違いを受け入れることができないだけで、苦しむ人がいる。私は、現代の世界でこんなことがあってはならないと思う。

仏教国のミャンマーは、イスラム教を受け入れてくれなかった。きっと、文化の違いを受け入れられなかったのだと思う。私は、何度も父の話を聞いているうちに、「受け入れる」ということの大切さに気付いた。私が今、日本にいられるのは、日本が私を受け入れてくれたからだという大事なことに気付いた。

私は、イスラム教の文化を大切にしながら、日本で生きている。例えば、豚肉を食べてはいけないから、弁当を学校に持っていったり、髪の毛を見せてはいけないから、スカーフをかぶったまま学校に通ったりすることができる。周りの人とは文化が違うから、最初は不安だったりするけれど、理解してくれる人が多くて、とても安心したし、とても嬉しかった。だから、とてもみんなに感謝している。私は、イスラム教とは、まったく違う文化の日本に住んでいるけれど、とても幸せなのだ。それは、周りにいる人が私のことを受け入れてくれるからこそだ。そして、そんな人たちがいたからこそ、私自身も日本を周りにいる人を受け入れることができた。

今世界では、五千以上の先住民族が存在していたり、私たちが知っている三大宗教の他にも数え切れないほどの宗教が存在したりしている。そして、今も難民も増え続け、世界では七千九百五十万人、地球上で、九十七分の一に値する数が難民になっている。では、私たちには何ができるのか。最近話題になっているSDGSの取組の中でも、「誰一人取り残さない社会」を作るため様々な活動が行われており、そういう活動を知ったり、寄付をしたりすることも大切だ。でも、何よりも、今を生きている私たちは、まず、身近な人から受け入れることが大切で

はないだろうか。自分とは違う人のことを受け入れることで、相手は感謝し、きっと、違う人のことも受け入れられるようになる。その輪が広がっていけば、世界が少しずつ変わっていく。

私自身も、日本に受け入れてもらった、日本を受け入れることができた経験を生かし、私の経験したことや経験から知った「受け入れる」ことの大切さを、多くの人に伝えていきたいと思う。そして、日本とイスラムの架け橋になっていきたい。

心より、誰もが生きやすい社会に願っている。

「今、私たちができること」

明照学園樹徳中学校　３年　新藤　苺香

今、日本でどれだけ食品が捨てられているか、みなさんは知っていますか。「食品ロス」と呼ばれるこの問題を私が意識したのは、ある日の祖父との会話でした。

祖父は、いつもご飯粒一つ残さずきれいに食べています。「終戦直後、食料事情は最悪だった。真っ白いご飯なんて、ほとんど食べられなかった。食事のときは、何がどれだけあるか、一瞬のうちに考え、自分が食べてもよさそうな分量を決めて食べたんだ。お代わりをすると弟たちの分がなくなりそうなときは、お腹がすいていてもお腹がいっぱいと言ったもんだ」祖父は、懐かしそうに話してくれました。

祖父の食べ物を大切にする心。それと対照的に、食事を平気で残していた自分が恥ずかしくなりました。そして、この日から、食べ物は絶対残さないようにしようと心に誓いました。家での食事では、自分が食べきれる分量をよそってもらうことにしました。たったこれだけですが、私の食べ残しは０となりました。それと同時に、食べ物を大切にする気持ちがさらに募りました。

現在「食品ロス」が社会問題となっています。日本の食品ロス量は、年間６１２万トン。毎日、国民一人ひとりが茶碗一杯分のご飯を破棄している分量です。みなさん、この現実をどう感じますか。

家庭の食品ロスは、全体のおよそ１／２にものぼります。この問題の解決に対して、家庭での食品ロス削減であれば、私にもできることがあるのではないか。そう考えた私は、母と一緒に、食品棚と冷蔵庫の整理を行ってみました。我が家にも、期限が切れたまま放置された冷凍食品や調味料、ひからびた野菜などが、たくさんありました。これらはいずれ破棄されることになります。反

省した私たちは、『むやみに在庫になる食品を買わない』『こまめにチェックする』『新鮮な内に使い切る』などの努力目標を立てたところ、我が家は、食品ロスの抑制だけでなく、食費の削減もできました。

さらに我が家は、生産者側の食品ロス抑制にも貢献しようと考えました。消費者庁で推進する、「引き取り手がなく捨てられそうな農産物などを販売するお店」というものがあります。我が家はそのお店から、野菜を購入しました。このように、食品ロス削減について、その気になれば一般家庭でもできることがありました。

それでは、食品ロスのもう１／２、つまり事業系食品ロスに対しては、私たちはどのようなアプローチができるでしょうか。日本では、事業者側は、『賞味期限の年月表示の拡大』『加工食品の納品期限の緩和や販売期限の延長』『フードバンクの活用推進』などを進めています。他方、消費者としてできることもあります。例えば、奥から商品をとらずに、陳列されている賞味期限の順番で買ったり、包装資材にちょっとキズや汚れがあっても、中身が問題なければそのまま買ったりすることです。

ＳＤＧｓ の達成基準の一つに、食品ロスの削減があります。これを受け、日本は事業からの食品ロスと家庭からの食品ロスを、２０３０年度までに２０００年度比で半減するとの目標を立てています。私たち一人ひとりが身近なところから食品ロス削減を意識することが、この目標達成には必要不可欠です。

みなさん、今日から食品ロス削減について考え、行動してみませんか。一人ひとりの取組が、大切な資源の有効活用や環境負荷の削減につながっていくはずです。

「今」だけでなく、「未来」が素敵な世界であり続けるために、今、私たちができることを、考え、取り組んでいきましょう。